

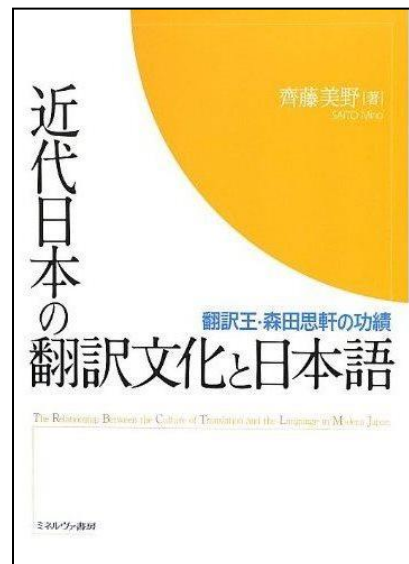
誌上討論

齊藤美野著『近代日本の翻訳文化と日本語  
翻訳王・森田思軒の功績』をめぐって

北代美和子<sup>1</sup>・齊藤美野<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 翻訳家 <sup>2</sup> 津田塾大学・東海大学・麗澤大学)

本稿は、齊藤美野著『近代日本の翻訳文化と日本語—翻訳王・森田思軒の功績』(2012, ミネルヴァ書房)の刊行を機として、明治 20 年代に活躍した文学翻訳者・新聞記者、森田思軒(もりたしげん, 1861-1897)の業績と当時の文学翻訳や言語に関する問題をめぐり、北代が提出した 10 の質問に、齊藤が一問一答の形式で回答したものである。北代は、文芸翻訳の実務家としての視点も含めた北代自身の意見も交えながら、本書の概要を紹介することを意図して質問を作成した。それに対して、齊藤は質問へ直接的に回答し本書の細部をつまびらかにするとともに、北代の意見・質問に刺激を受けて今後の研究の展望にも言及した。明治 20 年代は近代日本にとって、きわめて重要な転換点である。本稿のやり取りのなかからも、たとえば翻訳文における欧文脈と漢文脈の併存や、翻訳文体と日本語の変化の関わりなど、翻訳学の枠組み内でさらに追究すべき問題もいくつかあぶりだされてきたのではないかと考える。



1 — 齊藤さんはこれまで明治期における西欧語から日本語への翻訳を、とくに森田思軒を中心としてご研究されてこられました。2010 年度に立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科に提出された論文『森田思軒の翻訳観—共存する二つの志向』で博士号を取得。今回、上梓されたのはこの博士論文を修正・再構成されたものです。ひとりの翻訳者、森田思軒の業績が明治 20 年代の日本社会という広いパースペクティブのなかで論じられており、日本の翻訳研究ではこれまで見られなかった意欲的な試みであると感じました。

第1章の冒頭で述べられているとおり、翻訳学は文学、言語学、哲学はもちろん社会学、歴史学、ときには経済学までもが関わる interdisciplinary な学問と言えます。多くの領域を横断的に扱えることがこの学問の魅力でもあります。それだけに分析の装置を厳密に設定しないと、研究の目的が曖昧になる危険があるように思われます。とくに文学作品の翻訳を扱う場合は文芸批評に横滑りしがちです。本書では polysystem theory「多元システム理論」の採用によ

り science としての翻訳学が可能になり、まるで方程式を解くようにして、思軒の翻訳観の輪郭を明確に浮かびあがらせることができていると思います。polysystem theory について井上 (2011, p.57)は、「これまでマイナーな地位しか与えてこられなかった翻訳文学を、文学システムや文学諸ジャンルを構成する不可欠な要素として、既成の文学システムに変容と革新をもたらす可能性をもつ要素として、社会や文化や歴史の枠組みの内に、あらためて位置づけ直そうとした」と評価していますが、この理論を選択された動機は？ そして意図はどこにあったのでしょうか？

(齊藤)本書は森田思軒の翻訳観を、エッセイなどの形で残された思軒の言説と、「探偵ユーベル」と題された思軒の翻訳作品(1889年発表, 原著ユゴー)を分析し、明らかにしようというものです。さらに、思軒の翻訳観と社会的コンテクストの相関について、イーヴン＝ゾウハー (Itamar Even-Zohar) が提唱した「多元システム理論」(Even-Zohar, 1978/2004, 1990a, 1990b)の観点から論じています。思軒の言説と翻訳テキスト、さらに思軒が活躍した明治20年代の社会的コンテクストの関係性を描き、思軒の翻訳観には起点テキスト(翻訳の原文)志向と目標テキスト(翻訳文)志向が共存していたと考えられることや、明治20年代の日本の文学的多元システムにおける翻訳文学システムの位置の可能性などについて論じています。

本理論を選んだ理由をお答えする前に、多元システム理論についてごく簡単に説明したいと思います。本理論は文芸学者であり、ロシア・フォルマリストであるトゥイニャーノフ (Jurij Tynjanov, 1927/1988, 「トゥイニャノフ」と表記する場合も)の「システム(体系)」の概念に着想を得たものです。トゥイニャーノフは、文学作品とは一つのシステムだと考え、個々のシステムが相互に関連、影響し複数の層をもった大きなシステムをつくっているとしました。また文学作品同士だけではなく、そのほかの社会的要素とも文学は関連しており、相互作用の中で文学システムは進化していくとも考えています。そうすると文学作品について考察する際に、一つの作品を孤立させて研究することは不可能となり、外国語文学との関わりをも含め、多様な要素を考察対象とすることになります。イーヴン＝ゾウハーは、この考え方を文学翻訳の研究に導入したのです。文学的多元システムというのは、文学の翻訳作品を「翻訳文学システム」と捉え、同じ社会に存在する創作文学を「創作文学システム」、外国の文学を「外国文学システム」のように捉えた上で、そういった複数の文学システムが合わさりできあがった構造があるという考え方です。諸システムは相関し、文学的多元システムの中で主要な位置につくものとそうでないものがあり、またその位置、関係性は流動的だとしています。この概念によって、ある文学の翻訳作品をほかの翻訳作品や別のジャンルの文学作品、さらに変わっていく社会的コンテクストと共に考察することができます。

本理論を本書の論究の拠りどころとした理由は、明治20年代という近代化が進められた時代のコンテクストに言及しながら、文学の翻訳について論じる上で有効だと考えたからです。明治20年代の翻訳文学は、当時の文学的多元システムにおいて大きな存在でした。存在感があったことは、当時が近代化という変革の時代にあったことと深く関わると考えられました。明治20年代は文学作品の翻訳方法も、簡単に表現すると、それ以前とは異なり形式も重視する

訳し方へと大きく変わった時期ですし、そもそも目標言語である「日本語」が創りだされている最中でした(質問4を参照。さらなる詳細については本書第2章、3章を参照)。そういった社会的コンテクストの大きな変化と文学翻訳の相関性を考察する上で本理論は役立つと考えました。

さらにイーヴン＝ゾウハーは多くの場合、翻訳文学システムは文学的多元システムにおいて重要な位置を占めることがないという前提のもと、限られたケースにおいては翻訳文学が優位につくと論じています。各国における文学の転換期もその限られたケースの一つに挙げられており、このケースが明治20年代の日本の文学の状況に当てはまると、当時の文学や言語の状況を考え合わせると推測できたことから本理論の使用はおもしろいと思いました。文学界における翻訳文学の影響力は日本では認められていると言えますが、世界的にはそうではないということを本理論は示し、ではなぜ日本では翻訳文学が権威を付与され得るのかという点の説明もすると思ったのです。このような理由から、社会的コンテクストとの関わりを踏まえながら森田思軒という翻訳者の翻訳観や実践について論究する上では本理論が有効だと考えました。

2—「多元システム理論」について、もう少しお尋ねします。第1章でイーヴン＝ゾウハーを引いて、「文学的多元システムの中の1つのシステムである翻訳文学システムの内部にも、複数の層があると見なされる」(p.28)と書かれています。つまり翻訳文学システムはさらに下位のシステムに分割され、階層化されうるといことだと思いますが、これを突き詰めていくと結局のところ、システムの最小単位である「ひとりの翻訳者」、さらにはその翻訳者による「ひとつの翻訳作品」もまた、ひとつのシステムを成すことにはならないでしょうか？ ある意味で、本書の試みは「森田思軒」という最小のシステムを、それよりも上位のシステムとの関連で論じたということになると思います。個々のシステムを考察するにはひじょうに有効な理論である。しかし、文学的多元システムはあまりにも複雑に階層化され、内包されるシステムは無限であり、そのなかですべての下位システムを比較し、関連づけるのは不可能に思えますが。

—(齊藤)イーヴン＝ゾウハーの理論は質問1への回答の中で述べたように、トゥイニャーノフの「システム(体系)」の概念に着想を得たものです。トゥイニャーノフは、ある一つの文学作品はシステムだとします。よってご質問にある通り、一つの翻訳作品はシステムだと考えられます。そして確かに、そのように個々の作品全てがそれぞれシステムだと考え、それが合わさって大きな文学的多元システムが構成されるというのであれば、ある社会に存在する文学的多元システムを描ききることは果たして可能なのだろうかという疑問に思えてきます。たとえば「日本の明治20年代の文学的多元システム」という一つの文学的多元システムを、厳密な意味で完全に描写することは不可能、あるいは不可能に限りなく近いと思います。翻訳学における多元システム理論の提唱者であるイーヴン＝ゾウハーの論文(Even-Zohar, 1990c, 1990d, 1990e)を見ても、社会的コンテクストとともにヘブライ文学における翻訳文学の主要な位置を論じていますが、

各時代の文学的多元システムに存在していた全てのシステム、言い換えると全ての作品に言及し論じているわけではありません。このように言う、この理論を分析に用いることは有益ではないように思われるかもしれませんが、本理論の意義はきちんとあると考えます。

先に述べた通り、多元システム理論を分析の枠組みとして採用すると、翻訳テキストについて考察する際に、社会的コンテキストと翻訳作品の相関性を考慮に入れられます。両者の相関性について考察する際の一つの有効な分析法として、本書もこの理論を採用したのです。現在多くの翻訳研究者がそのように考えると思いますが、翻訳行為について論じる上で、社会的コンテキストと、あるいは文化やコミュニケーションと翻訳との関わりも重要な考察対象です。私もそのように考えているため、本理論を用いて森田思軒の生きた社会的コンテキストについても考察し、文学的多元システムを描写することを試みました。一冊の本には文学的多元システムの全てを描ききることはできませんが、本書のような研究を積み重ねることによって、またほかの研究者と協力しながら、ある文学的多元システムについて明言できることを増やしていければよいと考えています。

3——本書のポイントは、文学的多元システム内における翻訳文学システムの優位性を、思軒がもっていた訳出法に関する二つの志向——「起点テキスト志向」と「目標テキスト志向」——と重ね合わせて論じているところだと思います。原文重視か訳文重視かということは、それこそケロ以来、さまざまな用語を使って論じられてきました。翻訳の実務者としておもしろく思ったのは、思軒から100年を経た現代においてもなお、翻訳には限られた数の選択肢しかなく、基本的には「言語と文化を異にする他者への、外国語の異化効果の導入と最終的な母語への同化願望という、それ自体は相反する原理が、常に作動している」(井上, 2011, p.40)状態が続いていることです。ところで実務者から見ると、翻訳学で使われている「異化」あるいは「同化」は、かなり曖昧な用語だと感じるのですが、どうでしょうか？ つまりなにをもって「異化」「同化」の判断基準とするかということです。本書では、「起点テキスト志向」と「目標テキスト志向」という用語を使用されていますが、両者の判断基準をどう定められましたか？

(齊藤)「探偵ユーベル」の事例分析において、各分析箇所をどのように「起点テキスト志向」と「目標テキスト志向」の二つに分けたかというご質問かと思えます。本書の分析の枠組みは多元システム理論ですが、本理論ではテキスト同士や社会的コンテキストとテキストの関連は考えることができても、起点テキストと目標テキストの細かい対照分析をすることは難しく、別の分析装置が必要です。そこで本書は、①一人称の語り手(自叙体)の訳出、②訳文の逐語性(人称代名詞の訳出と節・句の配列法)、③欧文脈<sup>1</sup>の要素の有無、④当時の読者にとって馴染みのない語彙の訳出の四点に的を絞り、「探偵ユーベル」の英語の起点テキスト<sup>2</sup>と日本語の目標テキストを分析しました。この四点を分析項目とし、各点の分析において起点テキスト志向の訳出が行われた箇所、及び目標テキスト志向の(起点テキストから離れる)訳出法がとられた箇所を確認していきました。分析項目の設定は、思軒の言説と実践の関連や、思軒の翻訳文

体の特徴とされた点、また翻訳文体と当時の「日本語」創出の動き(質問4、また本書第2章参照)との関連を確かめるなどの理由にもとづき行いました。

ご質問は「判断基準」は何であったのかということでした。「判断」は当時の社会的コンテキストや、言語及び文章法の様子と照らし合わせて行いました。①から③の点については、それぞれの点が翻訳テキストの中で見つかった場合、起点テキスト志向だと判断しました。何故なら、こういった特徴は当時主流であった文章法のものとは異なるからです。①の項目では思軒がエッセイの中で主張している自叙体<sup>3</sup>の使用が、実践において行われていることを確認できたので、起点テキスト志向であるという判断をしました。思軒の翻訳文体は「周密体」と呼ばれ、漢文の要素と英語からの逐語訳の要素により構成されたものと言われているので、②の項目については例えば、節の配列の仕方などに逐語訳の要素が本当に見つかるのか調べました。「判断基準」としては、もし要素が見つければ、起点テキスト志向の訳出法がとられていたと判断したということになります。③の欧文脈は当時の日本文章の変化について考える上で欠かせないと思い取り上げました。この点についても、欧文脈の要素が見つければ起点テキスト志向の訳出が行われたと考えました。④の項目については当時の読者の知識、語彙との関連から志向性についての判断を行ったと言えます。これは思軒が翻訳作品の受容性も意識していたことを示す点であり、ゲーム名など特定の語彙を訳す場合に読者が理解しやすいように、馴染みのあるものに変更して訳していた箇所を取り上げました。このような場合はわかりやすさを重視したと判断し、目標テキスト志向だとしました。

以上のように本書は、思軒のエッセイに見られる主張や翻訳文体の特徴などをもとに四つの項目を定め、思軒の言説や当時の社会的コンテキストとの関連を考慮しながら起点・目標両テキストへの志向性について判断を行いました。ご質問の中で言及されているように、思軒は起点テキスト志向と目標テキスト志向の両方をもち合わせていたと私は考えています。そして、思軒の翻訳観に存する両志向は翻訳作品の中にも現われていました。両志向の繋がりが察せられる訳出箇所については、また別のご質問への回答の中で触れます。

4—第2章では、小森陽一の「植民地的無意識」に準拠し、国家主義の高まりによる明治期の「国語」創出の要請について、上田万年の発言を引いて論じられています。憲法によって、フランス語を共和国の言語と規定したフランスの例を見るまでもなく、「国語」を「国民」のアイデンティティの拠り所とするのは近代的なネーション＝ステートに共通するところであり、「統一国家」の象徴としての「国語」ということを考える必要もあるでしょう。また柄谷(2008, p.98)はルターによる聖書のドイツ語訳に触れて、「近代のナショナルな言語はすべて翻訳を通して形成されている」と発言しています。漢学からの脱却を、西欧におけるラテン語から vernacular への移行と比較することもできるかもしれません。

権力が「国語」を必要とした一方で、権力に属さない側にも新しい日本語が必要でした。自由民権運動の思想家たちは、新たに形成された公衆に「よびかけ、彼らを説得または扇動」するために、従来の日本語にはなかった二人称複数の「諸君」と、それに対応するものとしての

一人称「余」「吾輩」を多用しました(加藤, 1989, pp.450-457)。思軒は、『経国美談』の著者である矢野龍溪と交流があり、立憲改進黨にも入党しています。思軒が翻訳者として活躍した明治 20 年代には、自由民権運動はすでに挫折していましたが、自由民権運動に対する思軒のコミットメントはどの程度だったのでしょうか? 第 2 章 5 節で、自由民権運動に参加した若い書生、「壮士」の形式化した文体から、新しい「青年」の日常的な文章への移行を「政治小説から近代小説への展開」と重ねていられますが、ナショナルな新しい日本語の書き言葉(言文一致)は小説(と新聞)に担われた(柄谷, 2008, pp.289-290)という意味で、これは重要な指摘だと思います。そのあたりと関連して、思軒の政治思想がその翻訳観に影響をあたえているようなところは見られますか?

(齊藤)政治的権力をもつ者と権力をもたない者にとり明治 20 年代の人々を二分するのであれば、思軒は政治家ではありませんでしたが高い教育を受け、外国に行ったこともあるほどのエリートでしたので、思軒は権力をもたない者であったと捉えるよりも、権力をもつ側と思想を共にする近代的言語改良主義者であったと考えるほうがよいように思います。ご質問にあるように、当時思軒やほかの翻訳者が文学作品を翻訳する際の目標言語となっていた「日本語」(「国語」)は、国家主義的なイデオロギーによって創出されている最中の言語でした。それまでの清(中国)へ依存した漢文・漢語から脱却し、新しく言文一致体による「日本語」が創られていたのです。さらには、この新しい文体と関連し生まれた「写生文」という見たもの聞いたものを「ありのまま」に描写する文章法が、真理を表象する方法として採用されました。

この文体・文章法の変化は、思軒の翻訳観とも通じています。一例を挙げると、思軒は起点テキストにおいて用いられている表現方法に意識を向けず、安易に日本語の定型句類を用いて訳出することを否定しています。決まり文句に当てはめずに、起点テキストの形式をも「ありのまま」に、つまり活かして再現するよう努めるべきだと考えていました。質問 3 への回答において述べた点など、思軒の翻訳作品の中には起点テキストの形式を再現するような訳出箇所が見つかります。そのように起点テキストの文章形式を含めた情報を目標テキストにおいて表現することがまた、例えば欧文脈など新しい表現の形を日本語にもたらすことから、「日本語」の創出の助けともなっていたのです。さらに、思軒の翻訳作品やエッセイなどを喜んで読んでいた読者層もまた、近代的言語改良主義を共有する(全人口数から見れば一部の)エリートであったと言えます。翻訳者も読者もともに、新しい時代の近代国家において用いられるにふさわしい言語を創り出すことを望んだのだと思います。

5——明治期の日本語と関連して、日本語のなかにもちこまれた欧文脈が「異質」で「新鮮」なものにとらえられ、翻訳文を飛び越えて、日本語の文章のなかにとりこまれていったことを森岡健二に基づいて指摘されています(p.108)。欧文脈が採用されたことには、「清新さ」だけではなく、やはり「新しい思想を入れるためには、新しい器が必要だった」ということがあると思います。第 3 章で引用されている木坂基による欧文的表現要素(pp.106-107)で列挙されている

のは、曖昧性を排除し、西欧の論理的思考を担うために必要な形式です。

誤解を招くといけけないので、はっきりさせておきたいのですが、これは、従来、日本には論理的な思考を担える書き言葉がなかったという意味ではありません。中江兆民の『三酔人経綸問答』は明治20年の著作で、もとは漢文ということですが、きわめて理路整然とした文章です。このころから、論理的思考の媒体が漢文から欧文脈に移行し始めた、そしてそこには翻訳文の影響があつたと考えてよいのでしょうか？

(齊藤)まず始めに押さえておきたいのは、欧文脈は特定の文体にのみ生起可能なものではなく、漢文訓読体であっても口語体であっても、生きるたされていることです(本書第3章参照)。思軒の翻訳文体は漢文体の要素もあれば欧文脈の要素も含まれるものですので、「漢文から欧文脈に移行し」たという表現は実際とは合っていないかもしれません。そして、欧文的表現要素の全てが曖昧性を排除したかどうかはわかりませんが、動作主の明示などによって明白さが増した点は確かにあると思います。

思軒らが、「論理性」を求めたというのは、意味内容よりも形式性を重視することによって形骸化した「壮士」による文章を否定したという意味合いが強かったと思います。思軒ら以前の文体が非論理的であり、思軒らが初めて論理的な文体を用いたということではなく、何が「論理的」な、あるいは「最先端」で「良い」文章法とされたかが変わったと考えるほうがしっくりくるように思います。本書の考察範囲からは断定的なことは述べられませんが、少なくとも思軒のような西洋の作品に触れていた一部のエリートは「西洋の表現＝論理的」と考えたと思います。本書第5章に引いたように「日本文章の将来」(1888/1978)というエッセイの中で、思軒は西洋の文章からの「直訳の文体」が日本の将来の文体となる可能性とその利点を示しています。つまり、思軒は論理的な文体を求めていたと考えてもいいですが、西洋的文体を望んでいたとしてもいいのではないかと考えます。

**6**——思軒の翻訳姿勢で現代の翻訳者ともっとも異なると感じる点は、翻訳に読者を「啓蒙」する役割を担わせていたことです。このことが思軒の翻訳文体に影響をあたえた可能性はありますか？

(齊藤)読者の啓蒙という狙いが思軒の「翻訳欲動」(ベルマン, 2008)、即ち翻訳をしたいという欲望の大部分を支えていたと考えます。ただ娯楽を提供するだけではなく、思軒は日本社会の発展のために読者を啓蒙する役割を翻訳作品に担わせようとしていました。この狙いは、科学小説を選んで訳したように翻訳する作品の選択にも影響を与えていたようですし、ご質問にある文体への影響もあったと考えられます。啓蒙のためには、読み手に伝わらなくては、理解されなくては翻訳する意味がないですから、質問5への回答で述べたように西洋の文章法を日本文章に取り入れることを考えながら、当時の読者に受容されやすい翻訳文体を生み出そうともしていました。受容性を高めるための方法の一つには、漢文調や漢語の使用があります。

質問4への回答をお読みになると思軒が漢文・漢語を全く用いなかったように思われるかもしれませんが、実際には思軒は英語からの逐語的な翻訳による文体を採用しながらも、漢文調や漢語を用いることを全面的に避けていたわけではありませんでした。

受容性を高めるためにとつたと考えられるほかの方法を語彙のレベルから挙げると、思軒は「探偵ユーベル」の翻訳の中で、三人称単数男性代名詞の訳語として基本的には「渠(かれ)」を用いながらも、起点テキストの間接話法(話し手が自身のことを“he”によって語るセリフ)において使用された三人称単数男性代名詞は「己れ」という語を用いて訳出していました。起点テキストの“I”の訳語としては「己れ」は用いられず、「余」などが使用されていたことから、「己れ」と「余」の意図的な使い分けが考えられました。「余」は起点テキストの一人称代名詞に対応する箇所にもみ使用され、「己れ」は三人称代名詞に対応する箇所にもみ使われていたのです。この点から窺われるのは、まず思軒が英語のように日本語の目標テキストにおいても人称代名詞の明示的使用を実践していたことです。加えて、「渠」を用いた理解しづらい文章を避けて、誰を指すのかわかりやすい代名詞として「己れ」を使用したことも察せられます。さらに「渠」の使用は避けながらも、起点テキストにあるのは一人称代名詞ではないことを何らかの形で明示するために、一人称代名詞の訳語として用いていた「余」とは別の訳語「己れ」を用いたと推測できました。この事例に見られる人称代名詞の使用と使い分けから、新しい表現をするためのこだわりをもちながらも読者に受容されやすい訳出法を選ぶ努力をしていた様子が窺われたのです(さらなる詳細は本書第6章を参照)。先の質問3への回答の最後に記した両志向の繋がりが見られた訳出箇所というのはこの三人称代名詞の訳出のことです。思軒の翻訳観に見られた起点テキスト志向と目標テキスト志向の二つの志向の共存(本書第5章)が、実践においても示されているようでした。

7 — 柳父(2004)は「……は」で導かれる「主語」と文末語「……た」「……である」の創出によって、日本語における sentence の概念が成立したと指摘しています。思軒は「余は……」「渠は……」のように「主語」は明示していますが、文末のほうはあまり明確に意識していなかったような感じがします。本書に挙げられた事例では、読点は振られています、句点はどうだったのでしょうか？ 句点は使用されていましたか？ 関係代名詞や挿入節の訳出事例を見ると、周密文体は sentence の概念が欠落していたからこそ可能だったという気もしますが。

(齊藤) 本書第6章で論じたように、起点テキストで主語となっている人称代名詞の目標テキストにおける明示的訳出は多く行われていました。思軒は起点テキストにある一人称の語り(自叙体)、そして語り手以外の人物の人称代名詞も、日本語の対応する人称代名詞を用いて、広まりつつある段階であった三人称代名詞についても「渠」という語などを用いながら明示的に訳出する努力をしていたことがわかりました。柳父(2004)の言うセンテンス(文)の概念の成立は、「探偵ユーベル」の中には見出せないと思います。お察しの通り読点は使用されていますが、現在の文章法の感覚からすると非常に少量に思えます。幾ページも続いて読点が現われ



ない箇所もあります。句点については、カタカナの人名が数名分続けて書かれたところの人名と人名の間に丸い記号が句点のように振られている場合がありますが、文の終わりを示す働きはないので句点とは言えません。私の感覚では、思軒の訳文は言葉が区切られることなくリズムカルに続いていくように読めます。起点テキストの段落が変わるところで思軒も基本的には（一部例外あり）改行していますので、そこが読み手にとって息継ぎの箇所となり得ます。周密体は英語の文章からの影響だけによるものではなく、漢文体の要素も含んだ文体です。文末（にあたると思われる部分）には、「た」や「である」ではなく、「～や」や「～なり」、「～べし」などが用いられていますから、漢文体の要素がはっきりと見られます。

しかし、思軒の別の翻訳作品「牢帰り」（1896年発表、原著ディケンズ）を見てみると、読点に加え句点も使用されています。「牢帰り」は口語体を用い訳された作品ですので差異が生じたとも推測できますが、ほかの作品も調べないとはっきりしたことはわかりません。考えられるのは、思軒の訳文が生み出されたのは、文の概念が定着する前の時期であり、そういった時期に思軒が句読点の使用を試みていたということです。

8 — 第6章の事例研究では、受身形は能動形に訳した部分が多いという結果が出ています。日本語の受身形は「迷惑の受身形」と言われますが、思軒の翻訳にはそれが反映されていますか？

（齊藤）日本語の受身は、主に人が主語・主題になり「叱られる」のような被害を被っているという感情を表す際に多く用いられ、そのほかに「愛されている」というような恩恵の意味を表すものもあります。また物が主語・主題になり、動作を受けた主体に注目するもの（例えば「ポスターが張り出される」）もあり、主に人が主語・主題になる使用法が「有情主語の受身」と呼ばれるのに対し、後者は「非情主語の受身」と呼ばれます（富田，1993）。この三つのうち最初の使用法が思軒の訳文において用いられているかというご質問だと思います。本書の第6章に引用した「探偵ユーベル」の中に見られる受身の表現（「誤られし」（“deceived”）、「捕へられ」（“caught”）など）は、いずれも被害を被っているタイプだと読めます。ほかにも本書には引用していない受身表現の中に、「赦免されし」（“pardoned”）、「助けられ」（“assisted”）、「救はれり」（“saved”）という表現がありました（全て人間が主体の文章）。この三例は、恩恵の感情（「赦免してもらってありがたい」というような感情）を表すタイプです。

本書に引用した木坂（1987）が欧文脈だとしているのは、「非人称主語の受身表現」なので、厳密には上述した三タイプのうち三点目が欧文脈とされる受身表現だと考えられます。どのようなタイプの受身文であるかということは本テキストを分析した際には考察範囲に入れておらず、ただ目標テキストの表現が受身表現かそうでないかという観点から文章を二分割し、数値化しました。本書第6章の「受身（欧文脈の要素）」という項においてカウントした起点テキストの116の文章は、受動態という点では同じであっても、表された内容は違うのですから、受動態という点だけではなく主語や意味内容も併せて考察するべきであったと思います。富田（1993, p.

185)には、物が主語・主体となる「非情主語の受身」は「明治以降、欧米の小説等の翻訳の中で多く用いられ、それが次第に普及して通常の日本語の表現として定着したものだと言われています」とあり、木坂(1987)の欧文脈の説明と合致します。「探偵ユーベル」にも「暴挙行はれず」(“the threats have not been carried out”)という表現があり、思軒が翻訳作品の中で「非情主語の受身」を用いたときもあったことがわかります。しかし受身をタイプ別にみたときの使用頻度の違いについては、まだ明らかにできていません。今回のご質問から、受身表現についてもう少し細かく調べる必要があると気づきました。思軒の翻訳作品の中に人間が主語・主体ではない受身表現がどの程度見つかるかどうかはぜひ今後の課題としたいと思います。

9——思軒の翻訳は同時代の作家から、高く評価されていました。「学漢洋を兼て、而して殊に漢学の根底有る」(中江兆民)、「彼は漢学の素養あり」(徳富蘇峰)と言われたように、思軒が西欧だけでなく、漢学にも通じていたことがそのひとつの理由のようです。一方、現在、近代小説、あるいは近代日本語の成立を論じる場合、二葉亭四迷の翻訳は盛んに言及されるのに対して、「翻訳王」とさえ呼ばれた思軒に触れられることはあまりありません。これは漢文訓読体と欧文脈とが合体した思軒の周密文体が結局は消えていかざるをえなかったことと関係していると思います。第7章で思軒の周密体についてまとめていらっしやるので、ちょっと長くなりますが、引用します。「思軒の周密体は、英語の起点テキストに対する逐語性の高さと、自身の知識教養の土台であった漢文体に由来する漢文調の2つが性質としてあげられる(中略)これは、起点テキスト志向と目標テキスト志向が、直訳体(起点テキスト重視)と漢文体(目標テキスト重視)への志向として表れたのだと捉えることもできる」(p.229)。思軒が起点テキストを重視した背景には、西欧列強の「進んだ」考えを表しうる新しい日本語文体を必要としていた時代の要請があり、また思軒自身がそのような文体を生み出そうとしていたことがありました。一方で、思軒には読者を「啓蒙」しようという意図もあり、目標テキストに当時の読者に受け入れやすい漢文体をとりいれました。漢文体の採用は時代の必然であった、しかし漢文、漢学は衰退せざるをえなかった、そこに森田思軒の悲劇があったと言えるのではないのでしょうか？

(齊藤)お考えのポイントは、思軒の翻訳文体である周密体の起点テキスト志向、つまり逐語訳の度合いがもっと強ければ日本語の文体の中から消えなかったであろうに、(読者に受け入れられるために必要なことではあったが、)漢文体の要素ももち合わせていたことから周密体が消えていき、思軒も忘れ去られた(=「悲劇」)ということだと思います。ご指摘の通り、当時の読者が馴染みやすい文章は漢文体の要素をもつものだと思軒は考えており、その考えは、例えば思軒のエッセイ「我邦に於る漢学の現在及び将来」(1892/1989)に著されています。そうであれば、読者が別の文体に慣れ、漢文に読みやすさを感じるどころか、むしろ抵抗を覚えるようになると、思軒の翻訳文体が受け容れられにくくなると考えられます。しかし思軒があまり注目されていない最大の理由は、漢文の要素が思軒の翻訳文体にあったことよりも、36才という若さで亡くなったことに見出せると考えます。思軒が本格的な翻訳活動を始めたのは1886年

(明治 19 年)とされています。没年は 1897 年(明治 30 年)ですから、翻訳者としての活動期間は 10 年あまりでした。この 10 年という短期間の中では、自身の翻訳文体を完成できなかったのではないのでしょうか。続けて活動できていたならば、翻訳文体についても改良を重ねていったはずで

思軒は、上述のエッセイにおいて、言文一致体が厳かな文や碑文などに用いられうるようになるのはエッセイ執筆時から 10 年のうちではないだろうと述べています。言文一致体がすぐには多様な場面で使われるようにならないと思っていたということですが、裏を返せば 11 年後には使われるようになる可能性も考えていたと捉えられます。社会の状況や読者のことをよく考えていた人物ですから、もっと長く生きていたら、言文一致体の広がりなどを見ながら自身の翻訳文体をゆるやかに変えていくことはあり得ただろうと思います。また、時間があれば長編小説など後世にも高く評価されうる作品も訳せたと思います。本書に引用した柳田(1961)も、思軒がユゴー著『レ・ミゼラブル』を訳したいと考えていたようだと言っています。以上のような考えから、もし「悲劇」という言葉を使うのであれば、若くして亡くなったことを意味するために使えるかと思

**10**——本書の目的のひとつとして「翻訳学」という学問の紹介を挙げられています。森田思軒を通して、その実践の例を示されたわけで、翻訳学を目ざす若い研究者にはぜひ本書を読んでもらいたいと思います。現在のご研究の課題、また今後の方向性など、お考えになっていることがあればお聞かせください。

(齊藤) 翻訳という営為について色々な角度から研究を行っていきたいと思いますが、本書の考察対象と関連した関心事についてお答えすることにします。質問2の回答においても述べた通り、本書は明治 20 年代の文学的多元システムの全てを描ききったわけではないため、思軒の作品についてさらに考究することに加え、同時代のほかの翻訳者にも注目する必要があると思っています。また翻訳作品・翻訳者に限らず、創作文学・文学者についても調べ、創作文学が翻訳作品から受けた影響について考えることも重要でしょう。このように当時の文学的多元システムをさらに詳しく描いていくことは興味深く、研究を続けたいテーマですが、ほかの時代の文学的多元システムについても同様の関心があります。

もう少し細かい点について言えば、質問6への回答で述べた、「探偵ユーベル」起点テキストの三人称単数男性代名詞が「渠(かれ)」のほかに「己れ」と訳されていた点が気になっています。この訳し分けと思われる工夫を見つけたときは、思軒が翻訳していた際の思考過程をのぞいたようで、ひとり興奮し、ほかの翻訳事例も調べねばと思いましたが、まだそのままになっています。まずは思軒のほかの作品から、三人称代名詞の訳し方を続けて調べていきたいです。後の時代に、三人称単数男性・女性代名詞の訳語が「彼」「彼女」に落ち着く前の混迷期において、訳語選択のこだわりや工夫を見出せればおもしろいだろうと思います。

.....

**【著者紹介】**

北代美和子 (KITADAI Miwako) 翻訳家。日本文藝家協会会員。上智大学大学院外国語学研究所修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『アンダルシアの肩かけ』など。

齊藤美野 (SAITO Mino) 津田塾大学・東海大学・麗澤大学講師。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。異文化コミュニケーション学博士。文学作品を中心に、文化・社会・思想面から翻訳研究に取り組む。

.....

**【注】**

- 1 英語を中心とした西洋の表現形式と文法に影響を受けた日本語文章の語脈、文章脈のこと。例えば、主語や目的語の明示や、無生物主語などが欧文脈の要素とされる(木坂, 1979)。
  - 2 思軒はフランス語原著からの翻訳ではなく、英訳からの重訳を行った。よって本書が事例分析の起点テキストとして用いたのは、思軒が底本にしたと考えられている版の英語テキスト(Hugo, 1887)である。
  - 3 一人称での小説の語りのこと。思軒は「小説の自叙体記述体」(1887/1981)というエッセイの中で、三人称による語りのほかに、自叙体という技法も選択肢としてあることを日本の小説家に知ってほしいと述べていた。
- .....

**【参考文献】**

- Even-Zohar, I. (1978/2004). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 199-204). London: Routledge.
- Even-Zohar, I. (1990a). Polysystem theory. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 9-26.
- Even-Zohar, I. (1990b). The “literary system”. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 27-44.
- Even-Zohar, I. (1990c). Russian and Hebrew: The case of a dependent polysystem. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 97-110.
- Even-Zohar, I. (1990d). Israeli Hebrew literature. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 165-173.
- Even-Zohar, I. (1990e). The emergence of a native Hebrew culture in Palestine: 1882-1948. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 175-191.
- Hugo, V. (1887). *Things seen*. New York: Harper & Brothers.

ベルマン, A. (2008)『他者という試練: ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一・訳)みすず書房[原著: Berman, A. (1984). *L'épreuve de l'étranger: Culture et traduction dans l'Allemagne romantique: Herder, Goethe, Schlegel, Novalis, Humboldt, Schleiermacher, Hölderlin*. Paris: Éditions Gallimard].

ユゴー, V. (1889)『探偵ユーベル』(森田思軒・訳)民友社。

- 井上健(2011)『文豪の翻訳力 近代日本の作家翻訳 谷崎純一郎から村上春樹まで』武田ランダムハウスジャパン
- 柄谷行人(2008)『定本 日本近代文学の起源』岩波書店
- 加藤周一(1989)「解説」加藤周一・前田愛(校注)『日本近代思想体系 16: 文体』(447-481 頁) 岩波書店
- 木坂基(1979)「欧文脈の消長」『言語生活』第335号, 50-56頁
- 森田思軒(1887/1981)「小説の自叙躰記述躰」饗庭篁村(著者代表)『明治文学全集 26 根岸派文學集』(228-230 頁) 筑摩書房
- 森田思軒(1888/1978)「日本文章の将来」山本正秀(編著)『近代文体形成史料集成: 発生篇』(463-475 頁) 桜楓社
- 森田思軒(1892/1989)「我邦に於る漢学の現在及び将来」加藤周一・前田愛(校注)『日本近代思想体系 16: 文体』(27-42 頁) 岩波書店
- 富田隆行(1993)『これだけは知っておきたい日本語教育のための教授法マニュアル 70 例 下』凡人社
- トウイニャノフ, J. (1927/1988)「文学の進化について」(松原明・訳) 桑野隆・大石雅彦(編)『ロシア・アヴァンギャルド 6 フォルマリズム: 詩的言語論』(189-202 頁). 国書刊行会 [原著: Tynjanov, J. (1927). O literaturnoj èvoljucii. *Na literaturnom postu*, 4, 137-148].
- 柳父章(2004). 『近代日本語の思想: 翻訳文体成立事情』法政大学出版局
- 柳田泉(1961). 『明治初期翻訳文学の研究』春秋社

